

政治・経済・文化という3つの領域

中嶋道博

NAKAJIMA Michihiro

はじめに

ベルは社会を分析するための手法として政治・経済・文化の3つの領域に分けて分析するという方法を探っているが、こういった手法に対して違和感を覚えた人も中にはおられるようである。しかし私はあまり違和感は感じなかった。あくまでも「あまり」ではあるが。

というのは私は卒業論文のテーマに近代主義と日本の近代化のプロセスを選択し、そして卒業論文を書く際に大いに参考にさせていただいたうちの一冊、富永健一氏の『日本の近代化と社会変動』でも政治・経済・(狭義の)社会-文化という3つの領域に分けて分析されていたため、私にとっては、一見したところでは馴染みのある分析手法であるといえるからである。ただ、近代化を論じる場合は当然ヨーロッパにおける近代主義の誕生のプロセスを避けて通ることはできず、そこでは必ずといっていいほど宗教改革とルネッサンス(文化領域)、市民革命(政治領域)、産業革命(経済領域)が近代化のメルクマールとしてあげられているように、これらの3つの領域に分け、そしてそれぞれの領域についての近代化のプロセスを分析することはむしろ当たり前であるともいえないかと思われる。そして政治の局面では民主化の進展が、経済の局面では産業化(工業化)の進展が、文化や社会の局面では具体的には例えば共同体からの個の解放や組織の官僚制化、核家族の増大等によって論が展開されるのである。

このように分析手法は一見似通ったものであるといえるが、しかし非西洋である日本の近代化を分析した富永と、アメリカの1960年代を中心に分析したベルとでは異なる部分が見られるのは当然であるようにも思える。このように異なる対象を分析したものであるために適切であるのかどうかは不安であるが、本稿ではダニエル・ベルの主張と富永の主張を比較対照することによって、ベルの主張する3つの領域に分けて分析することの意義を浮かび上がらせることを中心目標にしたいと思う。

1. ダニエル・ベルの想定する3つの領域

ベルの分析視点はどのようなものなのであろうか。ここで大雑把にベルの3つの領域のとらえ方を概観し、次に富永のとらえ方を見た上で、両者の比較を行ってみようと思う。

ベルは社会を種々の関係が織りなしたひとつの存在と見るのではなく、技術-経済体系と政治形態、文化という3つの独立した領域からなるとしている。この3つは互いに異なった変化のリズムを持ち、そしてそれぞれが相異なった尺度で行動様式を合法化しており、社会内部のさまざまな矛盾は、これらの領域の間に存在する不調和が原因だとするのである。以下にこの3つの領域について概説する。

まず技術-経済体系は、生産の組織と財およびサービスの配分とにかかわっている。ここでの中軸的な法則は機能的合理主義で、それを支配する様式は経済化である。この分野の中軸的な構造は官僚政治

と企業における階級制であり、そして価値の尺度は効用、変化の法則は生産性の原理という単純なものである。

次に政治形態とは、社会正義と権力との戦いが行われる場所である。そこにおける中軸の原則は合法性で、民主的政治形態において暗黙裡に認められてきた条件が平等思想である。そして政治形態での中軸の構造は代議制と参加である。この政治形態の行政的側面は技術主義的かもしれないが、政治的決断は技術主義的な合理性によってではなく、取引や法律によって行われる。

最後にベルの想定する文化は象徴的な諸形態の領域である。本書においては「表現的象徴主義の場」という、より狭い意味で使われており、つまり芸術において、あるいは宗教的な形態において人間存在の意味を探り、何らかの想像力豊かな形式のもとに表現しようとする努力を指す。ここでの中軸的な原理は自己実現である。

彼はこのことから、社会変化には3つの異なった「リズム」があること、この3つの領域には単純かつ明確な関係はないこと、が明らかになるという。例えば技術—経済体系での変化とは、効用性と能率の法則が支配する、いわゆる直線的であるのに対し、文化における変化には明確な「法則」は存在せず、そして人間の実存的苦悩たる関心や疑問への回帰等が常に行われるのである。(上巻：35-44)

2. 富永の「日本の近代化と社会変動」における3つの領域

上でベルの分析視点について概観してきたが、次に富永の近代化論における分析視点について見てみようと思う。富永は前に述べたように社会を政治・経済・(狭義の)社会—文化の3つの領域に分けて分析している。ここでいう社会とは社会集団及び地域社会をあわせたもの、そして文化とは人間の思惟によって作りだされたものであって、シンボルに

よって客観化されて表現されているものを指す。彼がこのような分析手法をとるのはパーソンズのAGIL図式に準じているためである。

彼は近代化を、上記のようにAGIL図式に従い、Aセクターの近代化として経済領域の近代化、Gセクターの近代化として政治領域の近代化、Iセクターの近代化として社会の近代化、Lセクターの近代化として文化の近代化の4つに分け、日本の近代化をただまるごと、全体として分析するのではなく、上記の諸要素に分解するというパースペクティブに立つとしている。そしてここで社会と文化が合併されているのは、単に記述の簡略化のためであるとしている。

2-1. 3つの領域の特徴と関係

ベルのようにそれぞれの領域が異なる中軸原理に支配されているという言い方はしていないが、これらの領域の近代化のプロセス、つまり社会変動のプロセスをそれぞれ異なる指標によって分析しており、また各領域の近代化の速度には違いがあるという主張もあり、ベルの主張と共通する点があるように思われる。ここで上記の3つの領域の近代化を概観してみる。

経済的近代化は「産業化」としてとらえられる。産業化には科学技術の応用による生産力の急速な上昇という技術的側面と、それに基づいた経済成長及び経済成長に平行する形での近代的な組織と市場の形成等の経済システムの構造変動、すなわち経済発展という経済的側面の2つが含まれる。

政治的近代化は「民主化」としてとらえられる。これには近代民主主義の理念に依拠した政治システムと、その前提としての近代民主主義の制度を規定した近代法システムの両者が確立されることが必要である。

社会的近代化は「自由・平等の実現」としてとらえられる。これはゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの移行、そしてゲゼルシャフトにおける機能

的目的を、平等な個人による自由な競争を通じて達成するような方向性を持った社会変動を指す。文化的近代化は「合理主義の実現」としてとらえられる。これは伝統や因習、迷信や呪術といった非合理的な文化による拘束からの解放を指す。(富永 1990:43-44)

2-2. 3つの領域の近代化の速度

ここで非西洋の日本のような後発国における3つの領域の近代化の速度について見てみる。まず結論から先に述べると、経済的領域が一番早く近代化し、その次が政治的領域が近代化し、そして近代化が一番遅れるのが社会的・文化的領域である。その理由を以下順に述べる。

経済的領域の近代化が一番早いのは、上に述べた産業化の2つの側面、技術的側面と経済的側面は共に技術的、制度的なものであるために普遍性が高く、また効率性という客観的な基準によって計測が可能であるためである。また先発国に追いつこう（これに関してもGNP等客観的な基準によって測定が可能である）という意識から近代化への動機づけも強い。さらには変動によるコンフリクトも、この3つの領域の中では最も小さいと考えられる。

その次に政治的領域の近代化が来るのは、民主的な政治制度や近代法システムの確立自体は経済面における資本主義の確立と同様に技術、制度に関わるものであるが、政治に関してはそれのみに還元するものではなく、こうした制度の基盤となる民主主義の理念は普遍性に乏しく十分には客観化されがたいためである。そのために変動によるコンフリクトも経済面よりも大きいと考えられる。

社会的・文化的領域の近代化が最も遅れるのは、合理性よりもむしろ日常生活の中での生活感情に由来する面が強く、しかも例えば家族でいうと伝統的な家族よりも核家族の方があらゆる面で優れているとは一義的には主張できないためである。しかもコンフリクトは政治と比べて私的日常生活に関わる部

分が多いという点から政治よりも大きい、つまりこの3つの中では最も大きくなると考えられる。(富永 1990:58-64)

2-3. 諸領域間の歪み

このように各領域間の近代化の速度が異なるということは、必然的に各領域間の近代化の程度の差異が生じることを意味する。各領域、つまり各サブシステムは分化してはいるものの、他から切り離されて互いに無関係に機能しているのではなく、あるサブシステムの機能的達成は他のサブシステムの機能的達成を前提とし、それに依存している。そのためこのような近代化におけるサブシステム間の不均衡は各サブシステムの機能的ワーキングに障害をもたらし、あるいはコンフリクトを引き起こし、システム全体としての近代化の円滑な達成に支障を生じさせるといった結果を引き起こしやすいと考えられる。例えば戦前の日本を例にとると、非近代的な社会的・文化的サブシステムや政治的サブシステムからの影響が浸透して、経済的サブシステムにおいて非近代的資本主義の典型例の一つである財閥資本主義ができあがったのだということができるのである。(富永 1990:66-67)

3. ベルと富永の比較

両者による各領域の定義を非常に大雑把に紹介すると以上ようになるが、ここまでの部分ではベルの定義は富永によるそれとは特にこれとって食い違う部分はない。経済や政治はもちろんのこと、富永による（狭義の）文化の定義もベルの文化の定義とさほど食い違う点は認められないし、そして各領域の変化のはやさ、リズムが異なるとする点でも似通っている。

しかし両者の視点が根本的に異なるのは各領域間の関係である。富永は社会システムを支え、互いに依存しあい、影響を及ぼしあうサブシステムとし

て各領域をとらえている。それに対し、ベルの場合は分裂した社会において独自の中軸原理を持ち、互いに独立したものと見なし、その中でも文化の優位性を「文化が社会を動かす」、「社会は文化に白紙委任状を渡したとあってよい」といった表現で宣言するのである。

こうまで言い切ってしまうとベルは文化決定論者だという評価を受けるのは仕方のないことのように思えてくる。私の印象もそうであるし、例えば現在のアメリカのロック業界の状態などを見ると、こうした論調に対しては正直なところ疑問を抱かざるを得ない。というのも、ロックは、中でもとりわけハードロック／ヘヴィメタル（以下HR／HM）というジャンルにカテゴライズされるような音楽は、本来は自他ともに反社会的なもの、先鋭的なものとして自他ともに認める存在であったのだが、現在ではかなりの部分が商品化されているとあってよい状態である。あるグループがヒットすれば同工異曲のものを作るグループが続出するし、また「こういうものを作れば売れる」という、いわゆる売れセン狙いも多い。そういった作品にレコード会社が、「〇〇系の期待の新鋭」といったようなキャッチコピーをつけて市場に大量に流し、それを一般消費者がこぞって買い求める現状には、古くからのマニアックなファンからは「昔はよかった」調の嘆きが数多く聞かれるのである。こうした状態を見ていると、HR／HMが市民権を得たということはいえるにせよ、ベルのいうような前衛的な芸術（HR／HMは前衛的な表現を行っている、もしくは行ってきたといていいであろう。もちろんこのジャンルの中においても保守・先鋭の区別はなされてはいるが。）が社会を圧倒しているという主張とは逆に、資本主義の論理がより貫徹し、前衛的芸術をも商品化してしまい、市場経済の中に組み込んだという主張も可能であろうし、この方がむしろすっきりした、見た目にも分かり易い議論であるようにも思える。

ところで彼は『脱工業社会の到来』の中で、「マ

ルクスとは反対に、私は社会構造における変化が社会の他のすべての局面を《決定する》とは信じない」（Bell 1973=1975：3）、「私はマルクスと違って決定論的な歴史の経路を信じてはいない」（Bell 1973=1975：4）、「私はこれらの社会構造の変化が政治形態や文化の相対応する変化を《決定する》と主張するつもりはない」（Bell 1973=1975：23）など、くどいと思えるほどに自分が決定論者ではないことを繰り返して述べる。そしてさらに『資本主義の文化的矛盾』の「はじめに」でも同様のことを述べているのである。

これはおそらくベルが当時決定論的論調に偏りすぎているという批判を数多く受け、ある意味それに対する自己弁護のような意味合いで述べられているのであろうが、このことはいったい何を意味するのだろうか。決定論者ではないということの表明なのか、それとも経済決定論者ではなく文化決定論者であるということの表明なのか。

前者の解釈でいくと、先にあげた「文化が社会を動かす」等のベルの記述が問題視されてくる。では後者かというと、そうともいえない気もする。というのは、ギデنزが『社会学』の中でベルの脱工業社会論にふれており、そこでいくつか批判を加えている。その批判の中に、「脱工業社会という主張には、社会変動の際に経済的要因の重要性を過大評価する傾向がある」、そして「こうした仮説を提示する人々の多くはマルクスの影響をほとんど受けてこなかったか、あるいはマルクスをあからさまに批判してきた人達である。しかし彼らの見解は経済的要因が社会変動を支配すると考えている点で、擬似マルクス主義的見解なのである」（Giddens, 1993=1993：642）というのがある。私はまだ『脱工業社会の到来』を十分に読み込んでいないので私自身のコメントを加えるのは控えるが、もしギデنزの指摘が妥当なものであるとすると、ベルは文化決定論者にして、なおかつ経済決定論者だということになる。だとするならば文化と社会との矛盾を論じる前に自ら

の主張の矛盾をどうにかするべきではないか、ということになりかねないが、よく読んでもない人間に批判する資格はないであろうから、このあたりでやめておく。

ただ、『脱工業社会の到来』は「21世紀からの1視点」とされているように将来的な予測であり、60年代の分析という当時としては現状分析の範疇に入る『資本主義の文化的矛盾』とは時間的にズレがあるためだと見ることもできるかもしれない。

また、三沢教授が昨年度の演習において述べていたように、ベルは文化というものを非常に限定された用法で用いている。つまり文化という語を宗教と芸術に限定して用いているわけで、単に文化と言った場合の「広義の文化」を指しているわけではないのだから、一方では（ベルのいう）文化が『資本主義の文化的矛盾』にあるような形で社会の変化を方向づけ、そして他方では『脱工業社会の到来』にあるように、経済的側面が社会変動を方向づけて行くのだと見ることも十分に可能であろう。

まとめ

ここで当初の目的であった、社会を統一的なシステムとしてではなく独自の中軸原理を持った経済、政治、文化の3つの領域に分けて分析することの意義について考え、結びとしたい。マルクスやパーソンズ等のような、社会は一つの主要な原理を中心として構成されているとする理論に対して、ベルは既に述べたように現代社会を解明する一番良い方法は社会を3つの独立した領域が不安定な融合体をなしているものと見ることにする。しかしここで気になるのは、各領域がなぜ互いに独立していなければならないのだろうかということである。パーソンズの理論のように、統一的なシステムのもとでそれぞれが異なった原理と自律性を持って動いてはいけないのだろうか。ベルは3つの領域の中軸的原則として経済では機能性、政治では平等性、文化では

自己実現（あるいは自己満足）をあげているが、これらは近代化論の見地からすればすべてを合理性の一言によって説明することは可能である。ウェーバーの類型化に従ってもう少し詳しくいうと、経済に関しては禁欲、勤勉というプロテスタントの実質合理的エートスから導き出されたものではあるにせよ、効率や利潤の追求において、それについては技術的に優劣の判定が可能であるということから形式合理性とすることができようであろう。そして政治に関しては民主主義という究極的な価値に立脚し、その実現を追求するという点から実質合理性とすることができよう。また文化に関しては、ベルは本書では文化を宗教・芸術に限定しているが、これらについては宗教的・美的基準に基づいて究極の、そして固有の価値を置き、それを追求するものであるのだから価値合理性とすることができよう。

このように述べてはきたが、私はなにも別にベルの視点を否定しているわけでもない。卑近な喩え方をすると、トリックを使っても「スプーン曲げ」が可能であることを示した（先程あげた合理性の例）だけで、超能力そのものの存在（ベルの視点）を否定したわけではありませんよ、ということである。ただ、私の読みが浅いせいいか、ベルは超能力の源（視点の根拠）までは見せてくれないように思える。

<参考文献>

- Bell, Daniel 1976 The Cultural Contradiction of Capitalism=1976-77 林雄二郎訳『資本主義の文化的矛盾』(上・中・下) 講談社学術文庫
- Bell, Daniel 1973 The Coming of Post-Industrial Society = 1975 内田忠夫ほか訳『脱工業社会の到来』(上・下) ダイヤモンド社
- Giddens, Anthony 1993 Sociology 2nd Edition = 1993 松尾精文ほか訳『社会学』而立書房
- 富永健一 1990『日本の近代化と社会変動』講談社学術文庫